

まちを歩く



文化課 文化振興係 ☎53-4397
文化財係 ☎53-4393

地域に残る 指定文化財



その⑭ (飯南地区)

今回は、飯南町深野の来迎寺にある県指定有形文化財の銅鐘を紹介します。

この銅鐘は山門脇に見える鐘楼にあり、口径は55cm、高さが71cm、口唇の厚さは6.4cmあります。大きさ



▲県指定有形文化財 来迎寺銅鐘

は小さく、あまり装飾もありませんが、形状などに室町時代末期の特色がよく出ていると評価されています。

この鐘の中ほどには、銘文と呼ばれる文章が刻まれています。そこからは、作者や最初に祀られた場所などを知ることができます。

銘文によると、永禄11年(1568)に越前国(今の福井県)の山王大権現社の鐘として藤原朝臣三郎兵衛尉によって造られ、天正12年(1584)に三河国(今の愛知県)足助八幡宮へ移り、さらに明治12年(1879)に来迎寺が新しい鐘を懸ける際に桑名の鋳物師から購入し、やって来たことが分かります。

江戸時代には、諸国の名

所旧跡を紹介したガイドブックが数多く出版されましたが、『三河国名所図会』というガイドブックに足助八幡宮の鐘として紹介されています。

このように、現在、松阪市域にある多くの文化財の中には、この来迎寺の銅鐘のようにさまざまな経緯から日本各地を巡り、最終地として現在の場所に落ち着いたものも少なくありません。そのような文化財の履歴を知り、長い時間をかけて歩んできた道をたどっていくことで、新たな発見ができ、文化財がより身近な存在へとなっていくのではないのでしょうか。

多賀日記が語るもの —多賀寅之助の記録—



嬉野史編さん事業によって発見された文書群に多賀家文書があります。多賀家は、江戸時代に紀州藩堀之内村の地士や庄屋役を務めていました。

明治22年、町村制施行により、堀之内村は周辺の6



▲多賀 寅之助

か村と合併して豊地村となります。この豊地村の村長を務めた人物に多賀寅之助がいます。

寅之助は、元治元年(1864)3月に生まれ、明治22年4月の合併にともない村会議員となり、その翌年には収入役になります。そして、同30年に助役、37年には村長になりました。

多賀家文書の中に、多賀寅之助が明治14年から大正11年までの41年間にわたって書き続けた日記があります。記載された内容は、豊地村の行政や行事のみならず現在では残っていない地区の行事、農事など多岐にわたっています。また、この膨大な日記は、1日の書

き落としもなく綴られているため、当時の豊地村やその周辺の村々のおよそを如実に伝えてくれます。

大正11年11月20日、59歳で寅之助は亡くなります。この前日まで筆を取り続けた彼は、日記という形で時代の一部を見事に切り取りました。



▲多賀 寅之助の日記

多賀日記は、行政区域の変更や選挙法の改正、日清・日露両戦争など目まぐるしく社会が動いたこの時代において、寅之助が残した大切な遺産であり、松阪市嬉野地域の歴史を語るうえで欠かせない史料といえます。